

# 佐渡米通信

# こめへる

2024年 7 月号

発行日:2024年7月

発行：佐渡農業協同組合 担当：総務部企画課 駒形(葵)  
jasadosoumu02@snow.ocn.ne.jp

## 中干し指導会

6月初旬からJA佐渡管内のモデル圃場約70カ所で中干し指導会が行われました。中干しは田んぼに張っている水を抜くことによって土壤中へ酸素を供給して有害ガスの除去、根の活力を高め高温登熟に備えることなどを目的として行います。昨年の干ばつや元日に発生した能登半島地震の影響により漏水や水が不足している圃場について注意喚起と対応を説明しました。今年度からJA佐渡で導入を進めている栽培支援システム「ザルビオ」の中干し適期予測とJA佐渡営農指導員の予測を比較検討しました。今後、AIの予測と実際の結果について分析を行っていく予定です。

JA佐渡では新たなツールを活用することで米の収量・品質向上に繋げられるよう普及推進を進めて参ります。



指導会の様子

## 佐渡の米農家さんにインタビュー

相川地域高千地区で有限会社農援隊いけのを営む代表取締役鹿野潤めぐみさんにインタビューさせていただきました。同社は鹿野社長を含む女性4名で構成されています。コシヒカリ約8ha、牧草やWCSを含め約30haを作っており、加えて母牛50頭、子牛25頭を飼育しています。同地区の高千家畜市場では年3回島内畜産農家が育てた子牛の競り市が開かれ、同社の子牛は「令和6年度春季佐渡市子牛共進会」で最優秀賞を受賞されました。

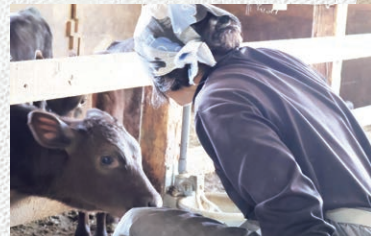
鹿野さんは獣医である実父から会社を引き継ぎ、先代からの方針で働き方を大切にすることを守り続けています。畜産は業態上休みを取りづらいですが、基本的に定めた勤務時間内で働ける体制をとれるよう管理されているそうです。

同社は家畜排せつ物に由来する堆肥を水稻や牧草、WCSの農地に還元し自社の中で耕畜連携の循環を形成することに成功しています。昨年度は猛暑の影響で新潟県全域で1等米比率が著しく低下しましたが、堆肥を何十年と入れ続けていた圃場では1等米を確保したそうです。そのことで鹿野さんは「長年の土作りのパワーを感じた」と嬉しそうに話してくれました。

生産資材の中でも肥料は輸送重量が多く環境負荷への影響も大きいので、JA佐渡では地域循環出来ることが環境に対しても配慮した取り組みとして重要視しています。JA佐渡管内の大型と牛繁殖施設から出る家畜排せつ物を堆肥にし、耕畜連携が普及するよう取り組みを推進して参ります。



直播栽培で省力化を実現した圃場前で説明してくれる鹿野さん



子牛の世話をする社員の方



## 生きものにも配慮した中干し

JA佐渡管内の  
田んぼにいた生きものは  
江に引っ越し!



均一な排水が出来るよう溝切りを行う



田んぼの生きものは排出される水とともに江に移動

温湯消毒 春耕耘 苗づくり 田植え 水管理 中干し 穂肥 稲刈り 秋耕耘 ふゆみずたんぼ



facebook



instagram



JASADOTANBO